話し言葉の多重連鎖構造

作成：S10（アルファベット表記）

学籍番号

1. はじめに

節連鎖構造というのは、二つの文書を繋がる文法構造である。節連鎖構造は、機能別で分類すると、以下のような種類がよく見られる。

節連鎖構造	機能	代表例
並列節	並列する文をつなぐ	また
条件節	条件関係を表す	であれば
理由節	原因と結果をつなぐ	だから
引用節	出典を説明する	によれば

このような節連鎖構造は、他の国々の言語においても普遍的に存在するが、日本語においては、連鎖構造が長く続き、非常に長い文書になる現象が特別に注目されている。そして、そのように多数の節連鎖構造で長く続く文章は本稿において「多重的節連鎖構造」というふうに定義する。多重的節連鎖構造は文書を延々と長引き、ロジックを混乱させてしまう側面があるため、外国人留学生の日本語学習における障害の一つとなっている。

この論文の目的は、大学院のゼミの談話における多重連鎖構造について、話し言葉での連鎖構造と相互作用について考察したい。その中でも、ゼミメンバーの間の相互作用がどのように多重的節連鎖構造を理解しやすくするのかというポイントに焦点を当て、留学生の日本語学習に意義ある示唆を得たいと思う。

実際、留学生はゼミでのディスカッションを苦労している。なぜなら、ゼミのディスカッションのような学術的口頭発表において、多重連鎖構造の頻度が非常に高くなるのだから。延々と続く多重連鎖構造は、聞き手に負担を与えてしまうため、日本語を母国語としない留学生にとってはコミュニケーションの障壁となっているのだ。本稿は、その障壁を日本語のネーテイィブスピーカーがどのように会話の相互作用を活用し、多重構造を乗り越えたのかを分析することで、留学生の多重連鎖構造に対する危惧を少しでも解消したいと思う。

2. 先行研究と本研究の位置付け

大学院のゼミの談話における話し言葉の多重連鎖構造について扱った研

究には「現代日本語の多重的な節連鎖構造について：CSJ と BCCWJ を用いた分析」（丸山岳彦）、や「日本語の教室における言語活動についての考察」（古賀知恵）などがある。

その中、「日本語の教室における言語活動についての考察」では、日本語の教室での言語データを分析し、日本語の「内容」より、話し手と聞き手の交流の「形式」を重視し、会話の参加者の相互作用について考察した。

また、「現代日本語の多重的な節連鎖構造について：CSJ と BCCWJ を用いた分析」では、日本語の多重連鎖構造の現象を定量的に集計した。筆者は図１多重連鎖構造が発生する頻度を「場面」と「機能」という二つの軸で統計調査を行った。

	書き言葉		話し言葉	
	新聞	雑誌	学会講演	模擬講演
並列節				
条件節				
理由節				
引用節				

（図１）

統計結果から、よりカジュアルな話し言葉、つまり、模擬講演においての多重連鎖構造の出現頻度が最も高いということが明らかになった。

しかし、日本語教室での相互作用や模擬講演においての多重構造を分析する先行研究があるものの、大学院のゼミの談話を対象に、会話の相互作用により、多重構造を理解しやすくさせる仕組みという観点から扱った研究はない。そこで、私はゼミでの相互対話で多重構造を理解する仕組みを分析したい。本研究は大学院ゼミで実際行われた会話データをベースにし、その会話の中で現れる多重的節連鎖構造を抜粋する。そしてゼミでよく現れる多重的節連鎖構造を機能別に分類集計を行う。また、どのような多重的節連鎖構造にどのような会話の相互作用がフォローするのかについて焦点を当て、そのフォローの効果を分析する。

３、研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話を文字化したものである。談話の

内容は、絵本多読を通じて外国語を学習するアプローチの有効性についての議論になる。

本稿では、文字化された談話内容を句数、種類別連鎖節、聞き手の反応数を統計し、節連鎖構造と談話参加者の間の相互作用の関連性を探ってみたいと思う。

４、分析の結果

まず、談話の全体的なデータを集計したどころ、下表のような結果が得られた。

発表時のデータ				
句の数	ので、	から	けど、	接続節数
63	7	10	18	35

質疑応答時のデータ							
句の数	ので、	から	けど、	接続節数	（質問者	（発表者	反応数
270	30	33	66	129	16	95	111

つまり、*＜談話全体のデータで示されるマクロ的な結論＞*

さらに、全体のデータから以下のようなサンプルを抽出し、ミクロベースで分析を行った。

＜全体から抜粋する内容＞

こチラの談話においては、ほぼ必ずと言えるほど話し手の節連鎖の直後に聞き手の合図が見られる。例えば、上文で引用した質問者 B の「因子分析」についての質問を定量的に集計すると、*下表（仮）*のようになる。

番号	節連鎖	機能	聞き手反応の有無
①	ので	理由	○
②	けど	理油	○
③	ので	並列	
④	と	条件	
⑤	ので	理油	

⑥	けど	理油	
⑦	とか	並列	
⑧	けども	理油	
⑨	と	条件	

それは、話し手と聞き手の間に自然と暗黙の了解が生じ、談話は自動的にキャッチボールのような話のやり取りシステムに入る現象だと推測できる。

ゼミの談話において、話し手が多重連鎖構造に入ると、それを聞き手も暗黙にこれからは多重構造の長文に入るであろうという予想ができるとする。そうであれば、話し手も聞き手もこれからの談話はかなり理解しにくくなることを共通認識として共有することになる。このような共通認識のもとに、聞き手は節連鎖の後に合図を入れることによって、話し手に「ここまでは大丈夫だ、続いてください」という情報を発信している。このような形式を通じて、表面上は話し手の多重連鎖構造は事実上のくっきりの付いている対話になる。

しかし、このような共通認識の共有は幾つかの前提条件を必要とする。その前提条件ができてないから、留学生の多重連鎖構造を理解する時の障壁を一層強化したのではないかと考えている。